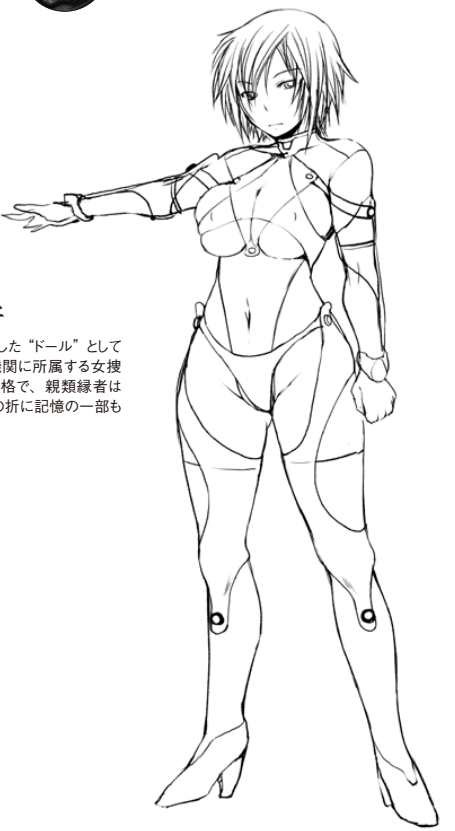
SLAVE DOLL
スレイブドール
紅眼の女特務捜査官
小説 空蝉
挿絵 ぽっしぃ
立ち読み版

Mission1　夜の住人　006
Mission2　幸福　056
Mission3　真実の散華　108
Mission4　白に、染まる　162
Mission Final　宴の夜、すべては終わりを告げた　200

登場人物紹介

Characters



黒崎京子（くろさききょうこ）

肉体を強化改造した“ドール”として国家警察特務機関に所属する女捜査官。冷徹な性格で、親類縁者はなく、強化手術の折に記憶の一部も喪失している。

ジャン

特務機関での京子のパートナーの男性。反政府組織『イージス』への単独潜行調査中に消息をたってしまう。

「あの男……ジャンっつったか。あいつの行方が知りたきゃ、おとなしくしろ」
わざと派手に街中で聞き込みを行い、テロリストとの出会いを演出し。故意に加減した一撃で追い込まれ、発言まで誘導されたとも知らずに、男は汗ばんだ顔に勝ち誇った笑みを張りつけて勝ち誇る。
（危険を伴う賭けだったが……当たりだったな）
せっかく、危機に晒されても問題のない頑丈な身体を得ているのだ。目前の男の言葉を借りるなら、有効活用しなければ意味がない。
問題は、唯一の予想外――相手となるテロリストが義体であるという事態だったが――。
「最初からそう言えばいい」
どの道、回り始めた歯車を今さら巻き戻すわけにもいかない。先ほどの攻防から、巨漢の攻撃では完全義体である身を破壊も殺害もできないとの確信は得ている。仮に先の一撃が五割程度の威力であったとしても、だ。
相手の溜飲が下がる程度に殴られた後は、イージスの拠点なりにでも連行されれば恩の字。最悪、ジャンが囚われていないことだけでもわかればいい。そのためなら。
「よくもやってくれたな。へへ、たっぷりお返ししてやる」
目前に迫る下品な男に殴られることも、嬲られることすらも厭わない。
無防備となった相手の思惑になど気づくよしもなく。見せつけるようにかざされた男の右腕が、今度はドリル状に練り込まれていく。

「おらっ！」
「ぐっ……」
硬く尖った塊で横殴りに頬をぶたれた。目眩と、苦い鉄の味を噛み締めながら、再度目前に迫った男の顔を見定める。
「武器を出しな。銃と、他にあるならそいつもだ」
「何も持ってきてないわ」
捕まるつもりで来たのだから、相手に奪われる可能性のある武器など携帯しているわけがない。
だが事情を知らぬ巨漢は、いぶかしげな目をすぐに好色に変えて下卑た笑みを差し浮かべた。
「なら、身体検査だ」
（つくづくわかりやすい男）
抵抗する様子がないと知って、無造作に伸ばした手で両胸をわしづかみにされる。野卑な見かけ同様の、乱暴な手つきに、丸みを帯びたシルエットが無残に歪む。スーツ越しに感じる手のひらの熱気がまるで肌に染み入ってくるようで、少しばかり心地悪い。
「義体のくせにばかでっけぇ乳ぶら下げやがって。官僚相手の娼婦でも兼ねてんのかよ」
己の腕を吹き飛ばしたのと同じ肉体でありながら、指先が沈むほど柔らかく、少し力を込めればちぎれそうなほどに突出した肉のマリ。それを蹂躙する悦びが、男の嗜虐を煽っ

ているらしかった。
「さぁ、どうかしらね」
乳肌をこねくりながら、安い挑発をくれる男の顔をわざと正面から見返して。意味ありげに微笑んでやる。それが気に食わなかったか、男の手が特殊スーツの下腹部を駆け下りて股の間へと伸び。
ぎゅむぅっ――。
「ン……っ」
茂みの密生する付近、柔肉を引きちぎらんばかりにつねられて、さすがに眉をひそめさせられる。
「機械のくせに生意気なんだよっ……」
「その機械を宿した腕を自慢げに見せていたのはどこの誰だ」
売り言葉に買い言葉。自己矛盾を抱えた目前の男に対して、つい言葉に棘を織り交ぜてしまう。
おそらく自己の顕示欲の捌け口として身体に機械を混ぜ、一方で完全義体を蔑む男。
まるで、完全義体化に踏みきれぬ己をごまかすかのように。吠え盛るその姿は理想ばかりを口にする集団のイメージとの乖離著しく、単に力を見せびらかすためだけにテロリスト集団に属しているのではないかという疑念がぬぐえなかった。
適当に嬲られて連中の拠点にまで連れ込まれるつもりだったが――何より、嫌いなタイ

プだ。どうにも我慢できそうにない。
ひとりごちた紅眼が見つめた先で。武器も探り出せず、女の快感も引き出せずに苛立った獣が、丸太のような剛腕を横になぐ。
「ぐッ……！」
あえて避けずに一撃を脇に食らい、威力を殺す目的も兼ねて派手に身をねじりながら背後へと自ら倒れ込む。
「なんだその目はぁっ！」
背中が地に着いた途端。鉤爪状に変化した液状金属の右脚で蹴り飛ばされ、軽く半回転。うつ伏せに寝転がった無防備な背中を、続けざまに何度も踏みつけられた。
「っ……は、ぅっ……これで、満足？」
背骨が軋む嫌な音を聞いたが、まだ。幸か不幸か頑丈な肉体に、痛みは奔らない。
「チッ、全身義体の冷血女が！　いくら殴っても張りあいがねぇ」
捨て台詞を吐き、予想より早く暴行をやめた男に対し、振り向きもせずに笑んだ口端からは赤い血が――京子がまだ人である何よりの証拠が滴り落つ。
「こっち向いて股ぁ開け」
暴力衝動が鎮まれば、次は性欲。
「……つまらない男」
言い回しひとつとっても面白みがない。明け透けな命令に従って再度仰向けに寝転がり

脚を開けば、しゃがみ、乱暴に割り込んできたドリルがぴたりと——女の芯へ。股下へと突きつけられる。ドリルの形状は、いつしか鋭利な武器のそれから溝部分が変化し、ヒダが幾重にも折り連なった、複雑怪奇なものへと変容していた。

「動くんじゃねぇぞ。少しでも変な素振りをしたら仲間を呼ぶ。んでもって人質の男は嬲り殺しだ」

お楽しみは独り占めしたいからな——乾いた哄笑が闇夜に響く。

（馬鹿が）

それがこの事態において唯一抱いた感情だった。

己の命や使命感よりも快楽を尊んだこと。そして人質について口を滑らせたこと。後者については真偽のほどは不明だが、とにかくこの牡の底が知れた。

この場で陵辱される事態も、想定内。元より抵抗するつもりもない。ジャンについて正確な情報をつかむまでは——。

「コイツで、このヒダつきドリルでたっぷり。隅の隅まで抉り回してやるぜぇ」

ギュィィィッ……とわざとらしいくらい盛大にドリルの回転音が響き渡る。回転に合わせ、付属するヒダ部分が微細な振動を伴い開閉していた。

「自分のモノには自信がないの？」

どうもこの男とは折りあいが悪いらしい。冷静に事を運ぶつもりが、つい悪態をつかされてしまう。

（一種の才能かしらね、これも）
「いちいちうぜぇんだよ！　このアバズレがぁ！」
ドリルの回転が増し、特殊スーツの股布を裂こうと力一杯押しつけられた。
「ぐぅッ……ぁ、あぁ……っ！」
よじれる布地に擦れて、膣肉が震える。ヒダドリルのもたらす微細な振動に脅かされ、否応ない悦楽の火が胸にともりかけるのを、唇を噛んでどうにか堪えてみせた。
「へっ。いいんだぜぇ、喘いじまって」
見透かしたように、男の顔が歪む。
ぶちっ、ぶちぶちぶちっ！
（そう……長くはもたないか）
頑健な肉体を持つ身だ。肉を抉られることに対する恐怖心は、ない。特殊スーツの限界まで、長くて四分弱。冷静に事態の把握に努める頭脳は、まだ充分な判断力を備えていた。
――大丈夫、やれる。自身に言い聞かせて、全身に回りかけた強張りを解いてゆく。
「くそっ、しぶてぇな」
グイグイと押し入るドリルごと、膣内にスーツの布地が食い込んで。
「ァく……乱暴な男は、っ、嫌われるわよ」
摩擦に煽られ、また胸奥の火が勢いを増した。腰の芯にゆっくりと響き始めた衝撃に、知らず知らず腰が艶めかしいくねりを披露する。噛み殺した甘露を呑み込むように、のけ

反る喉がゴクリ。垂れた前髪が地を掃き、砂ぼこりの煙たさにむせてしまう。
そのことを、男は己の行為が嫌悪を与えたのだと勘違いしたようだった。
「ひひ、やっとイイ顔になってきた」
救えない凡愚だ。だが、この身に宿る官能の酔いを醒ますバイブ代わり程度にはなるだろう。こき下ろした男を見つめる瞳は、まだ血の色の輝きを失ってはいない。
「どこだぁ〜？　おら、おら！」
調子に乗った男はドリルの回転を速め、好き放題に特殊スーツの股布上を往来させた。
「んぅ……」
時折回転のリズムが不規則に、おそらく男の呼吸に応じて変化するのが、酷く煩わしい。耐えようとした矢先や耐えきった直後に刺激を浴び、少量ではあるものの甘い声が漏れてしまうせいだ。
「動くなっつってんだろが！」
「……ッッ！」
おもむろに脇腹を蹴られて、またうつ伏せに転がされる。
（しまっ……）
男と己、それぞれの発する声音の不協和音に、ほんのわずか意識を囚われたのが災いした。不意を突かれる形での、予想外のダメージ。脇腹を突き抜けた鈍い痛みに顔をしかめ、唇を噛んでやり過ごし。

左肋骨粉砕骨折。内臓損傷。筋断裂。けたたましく脳内に響く体内ナノマシンの報告に、この日初めて紅い瞳が小さく揺らぐ。

ドクンッ――。

「んくぁぁっ！」

「な、なんだぁ急に」

ぴったり包むスーツの光沢のおかげでよけいに丸み際立つ尻肉が、電撃を食らわされたみたいに大きく、縦に跳ねる。

（き、た……っあ、ひ、ィィッ……！）

突如の豹変に目を白黒させている男に構う余裕は、すでになく。黒髪を乱し、地によだれを漏らして、来るべき衝動に対し身構えた。

ドクンッ――。痛みを抑えるためという名目で体内で分泌される脳内麻薬。組織の施した義体がもたらす効果を味わうのは、これが初めてではない。

そして「痛みの抑制」というのは理由のひとつにしかすぎぬことも、とうにわかっていた。

（これは私を縛る、楔っ……くぅ、あ、ぁぁぁっ）

戦闘で負傷するたび。媚薬にも等しい濃度の快楽物質に溺れさせ、その快楽を癖づけることで、任務漬けの日々に従事させ続ける。

そんな特務の目論見が今、心底恨めしく感じる。

「まぁ、反応があるほうが楽しいしな。へ、へへ」
——今すぐにでも、男を殺して脱出すべきか？
浮かんだ提起はすぐさま、早鐘のように鳴る胸の内で否決された。
（ダメ、だ、ジャンを……）
今逃げれば、組織によけいな警戒を抱かせるだけだ。仮にジャンが囚われているのなら、報復のために殺害される可能性も皆無ではない。考えるほどにネガティブな結果が浮かび、そうして、脱出の機会を自らの意思で握り潰してしまう。
「あ、熱いっ、あっあァァ……！」
尻肉を押し潰さんばかりに身を寄せてきた男の、汗ばんだ熱とにおいに、頭が眩む。
先日のように負傷したのみならまだしも、身を嬲られ続ける状況下での媚薬投入。脳内麻薬の効果を身をもって知っているだけに、理性を保ち乗りきれる自信は持てなかった。
みちっ、みちみぢぃッ！
「おら、とっとと破けちまいな」
ドリルに抉られた股布が悲鳴を上げる。同時に擦られた陰唇からは、嬉しい悲鳴とともに噴き立ての蜜液がよだれのようにトロトロと染み出し。
（くふっ、ぅあ！　っく、ぅぅ……！　今は、耐えないとっ、耐え……〜〜〜……！）
考えるほどに股間への刺激に意識が集中し、抑え難い快楽の大波に呑まれそうになる。
ぶちッ——。まるで処女肉が裂けた時のような儚い音色を聞き留めた、直後。

心は辱めを甘受し、胎底の子宮と一緒になって躍り狂っていた。
「ぁ、はぁ……ぁ、ン……！　そんな、に。私の身体に刻みたいか。そう、なのだな？」
群がる恋人が、競うようにマーキングを施して、所有物宣言をしてくれようとしている。そう理解して、たちまちのうちにすべてのことを許してしまう。
貪欲にさらなる辱めを欲して、媚を売る。覆いのことも忘れ上目遣いをして、上気した頬を差し出し。開いた股をくねらせて、身に纏う生地の厚みを、よりいっそう薄めさせた。食い入るように極薄の、湿った生地が割れ目を擦る。
（ほらっ、ほぉ……らぁぁぁっ。こんなにっギチギチ……食い込んでっ、イイのっ、奥までうずいて、しびれて、るゥ……見えるでしょう⁉　だ、から……早くゥゥゥ！）
喘ぐ腰を突き出し、淫らな腰振りダンスを披露する。幾重にも連ねてお膳立てを整えてやれば、案の定。
「では、わしはこの腋でっ……」
ずぅ、にゅるぶぅぅぅっ！
引き締めた腋の下。
「他に空きがないのですから、しかたないですな……っ」
折り曲げた膝裏。
「ふ、ふふふっ。では私はっ……」
さらっ――。

（あ……そ、それぇっ）

身震いするほど嬉しく感じる、優しい手つきで梳き掃かれた髪の束。その、中にまで。続けざまに灼熱の、肉欲棒が押し寄せる。

（ガ、ガチガチぃっ……♪　わ、私で昂奮して、玉の中までパンパンにしているのだなっ……あ、あァ……私をっ、独り占めしようと、してぇぇぇっ！）

幸せな妄想の連鎖に、胸の内の至福は天井知らずに高まっていった。

腋下のペニスのカリ首が、くすぐるように腋の凹みを行き来する。時折抉るように突き立てられては、胸の芯までが直接突かれたようにドクリと弾み。荒ぶる呼吸の合間に、甘く爛れた声を吐かされる。

「ふぅ……ぅあ！　く、くすぐった、ぁ……ぁ、あぁぁぁ……っ⁉」

足裏の指の間にまで先走りを塗り込められ、むず痒さの中にすら鋭敏な肉体は快楽を見出す。

「くすぐったいだけで、股根を濡らすのか？」

「だとすれば、むしろ稀代の変態性欲者ですな」

ハハハ――また、周囲で嘲りの声が広がった。

彼らの、愛しい人々の言う通りだ。

身のあちこちを襲う牡の脈動に呼応して、股の湿りも目に見えて増している。股根は少しもじついただけでグチュグチュイヤらしい水音が響くほど濡れそぼち、浅ましくもさら

なる肉欲を求め、飢えた獣のようにパクついて。
にゅづりゅっ！
「くぅぅぁぁんっ！」
膝裏を亀頭で扱き立てられた瞬間。まるで飼い犬が鳴いて食事をねだるみたいな、無様な鳴き声を張り上げてしまう。
奥の奥まで埋めて欲しい――衝動はすでに耐え難いほどに昂ぶり、延々。尻の揺れ幅はより大きく、妖しく、卑しさを纏っていった。
「……なんだ。髪に、やけに反応しおって……変態め」
珍しいものを見たとばかりに、恋人の一人が嘲りの言葉を口にする。
「い、いやぁ。ですがやはり髪は女の命、と言いますからっ」
己が罵られたわけでもあるまいに、髪にペニスを突き入れた恋人が、照れたように早口で――肉の鼓動も速めながら――まくしてた。
「東洋には、そのような格言もあるわけですか。面白い」
肩先で揃えた短い髪束は、肉棒をくるむには若干短く。東洋系らしい彼は自然と腰を寄せ、髪束も抜け落ちそうなほど強く引っ張られる。小さな痛みが、頭頂部に奔った。
「ひ、ひぐぁぁっ……!?」
あまりに乱暴な行為に、思わず目を剥いて睨みつけたくなる。なのに――。
（でも、でも……それがイイぃっ……痛みが、気持ちいいのに変わって、くゥゥゥッ）

痛苦は瞬時に肉の歓喜へと変容し、股間を直撃。うねり狂っていた腰が、ビクリ。まるで陸に揚がった魚のごとくシーツの上で飛び跳ねた。

「んひゃあっあぁうァァァッ！」

「ドールが耐え難い負傷をした際に分泌する脳内麻薬。あれの感知レベルを最低クラスにまで引き下げてありますから。嬲るほどにこやつは甘く鳴きますよ」

この調教のための措置だと。ちびってしまったと感ずるほどの痛切な喜悦の理由を、また遠くのほうで響く落ち着いた声が説明する。

（っふ、くふぁ……！　あっあぁ……は、はしたなく、お漏らしぃぃっ……！）

羞恥と侮蔑に満ちる只中で漏らすのは、この上なくみじめで――底なしに気持ちいい。ズクズクと轟く胎動に促されるがまま、溺れ、浸り、嵌まり込みながら。

（あいつ……は愛して、くれないの……かな）

すでに身ひとつでまかなえぬほどのペニスを相手取っているのに。股の芯を貫く衝動によって蜜漏らしつつも、寂しさを覚えてしまう。一人でも相手にしてくれない恋人がいると思うと、切なさに心が裂かれるようだ。あふれる寂寥に耐えられそうもない。

「おい！　手が止まっているぞ！」

べちんっ！

「ひふあぁぁっ⁉」

ペニスで塞がれていない側の頬を平手でぶたれた。それだけで、腰が再度浮き、ボディ

スーツに包まれた股根に黒いシミが浮く。後から後からあふれ出す愛液が、とっくの昔にスーツの吸水量を超えて染み出し、内部はもうドロドロの状態。内腿をヌチャヌチャと糸引く蜜が、泡立ちながら垂れ落ちていく。その心地悪さが被虐を煽り立て、よりいっそうの媚を、誘発する。

「す、まない。扱くからっ。一生懸命ゴシゴシするからぁぁっ。だ、からっ……」

だから――もっとぶって！

喘ぎ喘ぎ差し出した頬をぶたれて、また。身体の芯を突き抜ける愉悦に溺れ、舌突き出して卑しい嬌声を吐きこぼす。浅ましい痴態を晒す己の姿を、物見えぬまぶたの裏に映して喜悦する。そうすることで、今しがた覚えた寂しさを思考の外へ追いやって。

「やぁっ、はひ……っ！　ゴシゴシっ、するからぁぁぁっ」

にゅっ、ぢゅ……にゅぢゅづっ、ぬにゅづっ……。

「お、おぉ⁉　そ、そうだ。しっかり、竿の先もな……！」

命じられるがまま。むしろ命令の先読みまでして、牡の弱点を積極的に責め立てる。カリ首の部分を、親指と人差し指で作る輪で軽く、リズミカルに締めつけ。時折浅く指腹で幹を刺激することも忘れない。

（ふ、ふ……浮いた筋が、ドクンドクンって高鳴って……嬉しい。嬉しいのぉぉっ……）

記憶はないのに、身体に染みついた技巧というものは消えぬものなのだろうか。電脳にあるデータ以上の行動を、身体がとっさにすることがあった。今も――。

「首に……っ、ちょうだい。いつものぉっ……」
衝動の波が押し寄せる。無自覚なまま、首筋を差し出し。
「いつものだと？」
欲したのは、キス。いつも恋人の施してくれた、優しいマーキング。
けれど、応えてくれる者はなく。
「ふん。まだ欲しがるか、この欲張りの牝犬めっ」
ずにゅぅぅぅっ！
左の膝裏と、右腋下の二本が調子を合わせた様にピストンし、くすぐったさと、粘ついた期待とを胎底に送り届けてくれる。追加で右膝裏にも先走り滴らせた肉の棒がねじ込まれ。応じて折り曲げた膝裏を、執拗にゴシゴシ摩擦する。そうして絡められた牡の熱気が、すぐに欲したキスのことなど記憶の隅に追いやってしまった。
情事の際にしてもらうキスが、何よりも好きだった、はずなのに。
――でも今は、目の前の彼らに奉仕、しなければ。
（でないともう見向きもされなくっ。気持ちイイこともっ……してくれなくなってぇっ）
折り曲げた膝を揺らし、締めた腋でもペニスを摩擦する。腋を締めたことで強調された乳の谷間にも、左右の乳首を弄んでいたペニスが競って、切っ先をすり寄せてきた。
竿の腹ですり潰れた乳首が切なさを溜め込んでは硬く咲き。咲いた端からまたすり潰され、さらに硬度を強めて牡の幹へとすがりつく。

肌を這う肉竿の数が増えるほどに感度が増していくようで、息を吸い込むたび高鳴る胸の鼓動を押し潰す牡の脈動に、たっぷりと犯された。そうしてまた自発的に卑しく下肢を揺すっては数多の肉棒から悦びと蜜を搾り、悦に入る。恋人たちが求めてくれればくれるほど、肉の悦びは加速して、歯止めがかからなくなってゆく。

「あはァァッ……か、嗅がせてっ。味わわせてぇぇっ……」

唾液滴る舌を突き出し、できるだけ卑しく乞い連ねる。中毒患者が禁断症状を起こしたがごとく。熟れた尻を遮二無二振り立て、がに股に開いたままの股間を見せつけもした。

そうすれば即座に彼らは肉槍を腫らして鼓動を張り上げ、反応を示してくれた。人形と揶揄される身体で、悦んでくれていることを知らせてくれるから。

捨てられる不安を払拭するように四肢蠢かせて、奉仕に没頭し続ける。

「っぐ……。本当に優秀だな。こいつの前の飼い主はっ……。はっ、いったいどこまで仕込んだのやら……！」

ドロリと濁った臭みを吸い、陶然とまどろむ思考回路に、間近の男の声は霞んで届く。

判然とせぬ言葉の理解を諦め、手の内にくるめたそれぞれの裏スジを交互にさすっては、染み出たカウパーを搦め捕り。よりいっそう滑りを増してニチャニチャと摩擦した。

「んっ……ぢゅちゅぅぅっ、えはぁっ……れる、るっ……っちゅ！　んぷぅぁっ、あぷうっ！　味っ、比べっ……に、におひっ、すっ、すぅぅっ……あぁっ、はぁぁ……っ！」

「偉いぞ。ちゃんと命令を覚えているな。ククッ」

遠くに響くマスターの声。周囲で囃し立てる声もまた、マスターの声だ。
鼻先にあてがわれた一本のペニスの臭みを思いきり吸い込んだ。その拍子に先走りまで啜り取り、鼻梁の内部までもが粘つきに犯される。愛しい人の熱とにおいで、全身くまなく満たされる――想像しただけで、発情した子宮が涙混じりに降りてきて。
ずずっ……ずずずぅっ！
まるで鼻水を垂らしたかのような間抜けな音を、鼻腔が奏でる。
「わははっ！　ひどい有様だなっ……」
振動で亀頭を擦られたらしい鼻先のペニスがまたも、どぷり――濃いめの先走り汁を吐き飛ばし、牝の胎の慟哭を招く。
「んぷぅぅぅっ！　けほっ、けぽっ……ぁは、あはははっ」
鼻ちょうちんが浮いた。次いでえずいた拍子に生臭いげっぷが吐き出され、震えた口元のペニスがまたまた濃い汁と熱を注ぎ入れてくれた。
永久機関のごとく連鎖する肉欲のたぎりに、舌鼓を打ちながら。
（もっと、もっと見て！　みじめな私をっ……私だけをっ、見ててぇぇぇっ！）
無様な姿に自ら嘲笑を浴びせては、被虐を引き出し、煮えたぎるマグマのごとき劣情に身を浸らせる。うずく股根を揺すっては、真新しい蜜を腿に、シーツに噴き飛ばした。
「……順番待ちをするのも、酷ですな」
「う、うむ。確かに……っ」

（ぁぁ、だ、めぇっ……出すなら私の口に……口の中にどぴゅってしてぇぇっ！）
場所取りに敗れた恋人たちの何人かが、シコシコと自らの手で勃起した逸物を扱いている。彼らの上ずる声と増しっぱなしの室内の臭気、熱気から様子を汲み取って、真っ先にもったいなさを覚えてしまう。
「は、は、っふぅぅ……では、できるだけ我々も早くに交替をっ……。そ……おらっ！」
にゅぢゃッ、にゅるりゅッ、じゅにゅぷぅぅぅッ！
髪に肉棒をくるめた彼が、乱暴に腰を揺する。
吐き出される欲熱と先走りの粘り気が、見る間に髪に絡み、染みてゆく。
（綺麗だって、褒めてくれたのに、な……）
黒髪が好きだと。長い髪よりもショートヘアが好みだと言ってくれた恋人は、今。この中にいるのだろうか。そんなわずかばかりの寂寥も、じきに髪から伝わるネチャネチャした肉の鼓動に蕩かされ、悦楽の中に埋没していった。
「くくっ、そら今度は口がお留守だ！」
リップクリームの要領で、競うように先走りと、絡む唾液とを塗りたくっていた口元の二本の肉棒。うち一本が再び口中に潜り込み、ズコズコと喉奥を突き叩く。
「んぶぅぅんおぉぉっ⁉」
よく味わう暇も与えてくれないなんて、酷い男だ。内心拗ねながらも、醜態に注がれる熱視線と苦みとに没頭する。

女の尻が窄まり、引き攣れて、にじんだ汗を振り落とす。もう、じきだ――かつて毎日肌を重ね合わせた経験から、気づかされてしまう。もう、間もなく、彼女は、俺ではない他の男の手と舌で絶頂に導かれるのだ――。

「れぢゅりゅるる！　んぼっんぢゅぶるるっ！　ぢゅっぼぢゅっぢゅづづづぅぅ！」

クリトリスをついばんだまま、初老男が肺一杯に息を吸い込み、同時に噴き出た蜜汁を胃袋に収めていく。

びくンッ！　びぐっ！　びぐびぐっ！

「やぁはっ！　ぁひ！　ひっ、い、イィィッ！　いぐふぅぅぅ――――！」

あまりにもあっけなく。それでいて底抜けにイヤらしく。牝の香りを振り撒きながら、残響する女の絶頂の証。切なく、甘く、悦びに満ちたその声はしつこいくらいに広い室内に響き渡った。

「ひぁあぁぁ！　あッ！　あ～～～……!!」

揺れておぼつかぬ足取りで、牝は主人にすり寄り、しがみつく。前のめりに身を預けた彼女の横顔から表情が垣間見えた。

（ッッ――――！）

安堵と至福に満ち足りた、見慣れてた顔だった。かつては毎日毎晩この手で抱き締め、腕の中から覗かせていてくれたはずの――他の誰もが見たことがないはずの――この身だけが知っているはずの。

「むぢゅるるる！　んぶはっ！　ぢゅっ！　ぢゅぶぢゅ！　ん～ぢゅづづづぅっ！」
「はひぃッンンン！　イっ、へまふうぅぅ……！」
ろれつ妖しく舌を回し、よだれを吐きこぼしてなお尻を振る。男に押しつけた尻の谷間、おぼつかぬ脚の股根からは啜り飲みきれなかった蜜汁と混ざりあい、黄ばんだ汁までもが滴り落ちてゆく。
「むぼっ！　まぁだじゃぞっ、まだっ……ほぉれ、ほれほれっ！」
ぢゅりゅるっ！　ずぼっぶぼぶぽォッ！
「ひゃひッィィィ……～～～……！」
容赦なく、肉まで啜る勢いの牡に責め立てられて女は続けざまに潮を噴く。
（なんて、ツラしてんだよ――！）
自ら振り撒いた唾液でベトベトの赤ら顔。肉欲に蕩けた瞳を振り向けて、京子に似て非なる女はあるじに鼻声で応えていた。
見るまいと思っても視線を外せない。胸に渦巻く憎悪と嫌悪の増幅に比例して、ガチガチに張り詰めた逸物がスーツを内から押し上げる。みじめな昂揚に侵されて、自尊心は砕けて散った。
「さて。それでは……」
「は、はぁ……いっ……♪」
ひとしきり噴き散らしたのち。ようやく解放された女の肢体は、自らの意思で再度男の

出っ腹にすり寄っていく――。

「ァ――はぁ、ぁ――……！」

自らの指でめくり寄せたショーツの脇から、ズブズブと。胎の奥が満たされていく感覚に浸りながら、あるじの上に腰を落とした。

あっさりと膣の底にまでたどり着いた肉の切っ先が、悦び勇んで鼓動を放ち、子宮を揺さぶり立てる。女としての至福を味わわせてくださる、唯一無二のマスターへの恋慕が限りなく噴出し、汗と、嬌声と、蜜液とともに全身から染み出していった。

「ふんっ、欲深なやつだっ……」

嘲りながらも、嬉しげに肉の棒を猛らせて、絡む膣肉のヒダをゆるゆると擦り立ててくれる。

「ふわ……っ、ぁ！　申し訳っ、ございまあぁっ！　ございませんっ……ンンぅ！」

焦らす腰つきにまんまと乗せられ喘がされ、淫らな腰振りダンスを引き出させられる。それすら「あるじの求めに応えている」という従属の喜びを芽生えさせてくれる至上のスパイスとなりえた。

（ぁ……また……見ているっ、あ、熱い、執拗な目で……ぇ）

マスターに騎乗位で跨がる裸身と、ちょうど相対する真正面。ベッド下の絨毯に拘束されて正座で座る男。相も変わらずの彼の熱視線がスーツに覆われた肌に、下着からはみ出

し剥き出しの結合部へと突き刺さる。
不思議な瞳をしたやつだと思った。憐れむようでもあり、慈しんでいるようにも見える。それでいてねっとりと熱を孕み、特務スーツの奥の素肌へと染み入ってくる。
この視線をじかに味わいたくて、今の体勢を選んだのかもしれない。そう思わされるほどに、やたらと彼の視線は肌に馴染み、切なさ混じりの快愉へと身を引きずり込んでゆく。
「ハハッ、好きなだけ見てもらうといい」
ベッド下の男に脚を向ける形でシーツに身を沈ませたマスターが、心底嬉しげに言葉を紡ぐ。
（私を見せびらかして……あぁ、私を自慢してくれてるんだっ……）
侮蔑に満ちた声の響きすら、愛おしい。
「はぁ、ぁイッいィ！　見てっ、もらいますぅぅ！　んぁッあッあぁぁッァ――――」
真下のあるじに蕩けた瞳で応じてから視線を再度真正面へと戻せば、不敵な――それでいて妙に憂いと苛立ちを帯びた男の視線と衝突する。
パンパンと肉同士がぶつかる淫堕な音色。わざと腰を派手にくねらせ、絡まる淫音で自らとマスター、そして彼。部屋に潜む者すべての耳朶をくすぐった。
「漏らさぬように、締めておけ……！」
「ふぁひっ、はッ、ァいッ……！　オマンコ締めたままっ、ズコズコいたひ、まふぅっ」
汗のにじむ手のひらで尻を乱暴につかまれ、つねり上げられる。小さく鋭い痛みと甘美

に腰震わされて漏れ出かけたのは、蜜壺にたっぷりと溜め込まれた愛液のみならず。掻き混ざる粘着質の水音。その源は大半、先だって胎が膨れるほど注ぎ込まれたマスターの子種。白く濁り、濃く粘る白濁液がもたらしたものだった。

「……年も年でしょうに。ポックリとイっちまっても、医者は呼べませんよ」

猿ぐつわを噛まされていない虜囚の口は滑らかだ。男が拘束された四肢をこれ見よがしに揺すって見せつけ、皮肉めいた台詞を吐き捨てる。

（じっと……っ、見てる、ぅっ……あいつの視線がアソコに……垂れかけの子種をはしたなく啜って引き戻す私のっ、股の奥をぉっ……！）

大量の蜜と注がれ滴った子種とで湿り、水着のように肌に吸いつくショーツに、真新しい蜜が染む。マスターへの侮辱に怒りを覚えるよりも、熱視線を浴びた子宮のうずき――腰の芯からむずむずと甘くくすぐる焦れったい刺激への歓喜が先に立った。

「腹上死かね？　ありえぬ話ではないな。この穴は具合がよすぎる。――だが、まだまだ食い足らんよ」

鼻でせせら笑い。一糸纏わぬ裸体の腹を、つかまれたままの尻に押しつけてくれる。

「くぅンッ、あ……！」

応じて尻を擦り寄せ、腰を回せば、凶悪な角度で張った肉傘のエラが膣肉の上部を擦り。切なげに吐息を漏らせば、あるじは愉悦に浸った声を弾ませた。

「だが、毎夜毎晩この人形とベッドをともにした君の言葉とは思えな。ジャン君」

黒髪を無造作に引っ張り上げられて、わざと快楽に咽ぶ面を虜囚に見せつける。
「ぁひっ、いっ、イイっ。はや、くぅっ……もっと、奥までずぷぅーってきてぇぇっ」
あるじより放たれた言葉を聞き取れぬほどに。マスターからの所有物宣言に、拘束された男のいきり立った視線。そのどちらもが女の身の奥底までも火照らせ、蕩ける快楽で思考回路を麻痺させてゆく。肉棒を挟み込んだ膣肉から、ネチッこい蜜を染み出させる。
「うぐ……ふ、ふははっ。とんだ欲深娘だッ」
禿げた頭頂をなで擦りながら、にやけた面を堂々晒し、人形の持ち主は自信に満ちた様子で肉棒を弾ませて腰を振り続けてくれる。
「ァァ……くふ、ぅんっ、ご主人様のおちんぽぉっ……イィッ、ですぅぅっ」
そのうえで、突き上げられながらただただ、啼く。人としての矜持すら失くしただらしなくふぬけた顔つきで、ケダモノじみた鳴き声を上げて――。
服従する悦び。肉体と心にプログラムされた至上の喜悦にまみれ、沈みながら、何度も。何度も肉棒のカリと、折り重なる膣ヒダとをすり合わせた。
「お、おォッ……どうせ、生身の君ではドールには勝てまい？」
ドクンッ――また、強烈な牡の鼓動が胎の奥で轟く。嬉しくて、腰と脳髄が蕩けるほど心地いい。
（そう、だ……あの男は敵、だからぁっ……命じられれば、いつでも、コロスぅぅぅっ）
マスターは「廃棄処分だったところを拾ってやったのだ。当然だろう？」と、出っ張っ

た腹を揺すりさも楽しげに、笑い、昂奮し。よりいっそう硬直した怒張で牝の穴を突き、掻き、ほじくり回す。

キュンキュンと鳴き声を発するようにうねる子宮から、また。大量の蜜汁が腿まで滴り付着する。汁気を吸い尻の谷間や股間へと食い込む下着の感触にすら腰が震え、歓喜の喘ぎが迸り。

「そ……らっ、もっと締めんか！　この！」

一度精を注がれたことでほぐれ、真新しい牡の味を欲して引き攣れている膣穴。朝から晩まで乾く間もなくぬかるんだ肉の洞穴を我が物顔で蹂躙する牡の切っ先が、トロトロの膣ヒダを強かに掻きむしり、止め処なく分泌した蜜液が掻き混ざる。

「い、イッれふ……っ！　奥までずっぷりィィ！　届いて……っ、子宮の入り口をこじ開けようとして、ますううぅ！」

きつい肉洞でより自己主張するように猛々しく膨張した肉の幹が鼓動して、内側から圧迫される。その、息苦しさと同時に味わわされる「胎を満たされる」至福の悦びに息詰まる。執拗に叩かれ、すり鉢のごとく擦り立てられる子袋の扉もまた、貪欲に亀頭の先の割れ目へとキスをした。

「お、ぅ……！　そんなに精が欲しいかっ⁉」

「は、はぁいっ、ほ、欲しっ、れすっ、うぅ！　マスターのっ、こだねぇぇっ……！」

あるじの喜びを悦びとし、いついかなる時でも従属する。突かれ、躾けられるたびに胸

の奥が高鳴り、幸せを延々と注いでくれるのだ。
（それだけが私の、幸せっ……だからぁぁっ！）
子を産めぬ身体だと理解してはいても、女としての本能が悦び、勇んであるじのペニスをひと際深く咥え込む。汁気たっぷりのショーツが、真下からの突き上げに合わせ淫らな水音を響かせた。
その有様のすべてを、じっとあの男が――床の上で微動だにせず見つめ続けている。
（なぜ、だろう……あの男に見られてると思うと）
より強く。膣内ですがり蠢く肉壁の動きが体感できるほどに、ギチギチと胎の中の男根を締め上げてしまう。
「どこに欲しいっ」
強かに尻をぶたれ、匂い立つような汗を噴きながら、舌を突き出して躊躇なく叫ぶ。
「中、ァァッ……おなかの奥にっ、中にぃぃっ。たくさんっ、たぷたぷするくらい、そっ、注いでくださぁいッ、くぅあぁぁンッ！」
即答だった。言葉の先を読み、あるじの悦ぶ台詞を吐いて――そうして、肉欲の虜たる牝人形らしく、甘美に震える尻を振る。
（そうだ、もっとその目で私を……見ろッッ）
抜き身の刃を思わせる冷たい輝きに満ちた瞳。その中にわずかばかりの感情が揺らめいている。人を寄せつけぬ空気を纏っているふてぶてしい虜囚の視線が、なぜだか無性に欲

しくてたまらない。
「そうか、中に欲しいかッ！　ふははっ、孕めるわけもないのになァッ」
吠えながらも腰振りの激しさ衰えぬあるじが、狂気じみた哄笑とともに唾をまき散らす。
「は、はひぃっ。ほ……しい、ですぅぅっ」
昂奮した肉棒がひと際膨れ、悦んだ膣肉が締め上がり、自ら牡肉の感触をより強烈に感じ取る。狂おしいほど胸躍る身を揺すって髪を振り乱し、涙ながらに懇願した。
ジッ――。
（――⁉）
甘美と陶酔の中、不意に脳裏に浮かぶビジョン。
『子ども……か』
見知らぬ田舎街で、遊ぶ子どもと連れ添う母親を見かけ、羨ましげに呟いた誰かの横で、あの男が――今まさに虜囚となっている彼が微笑んでいる。
ジジッ――！
『そうだな……まずは男の子で、でも、女の子も欲しいかな』
違う声をした、髪の長い女の横で、希望に満ちた表情で未来を語る若者の姿。
まるでテレビ映像をザッピングしたみたいに次々まぶた裏に浮かび上がる光景。それは妄想などでない、リアルな質感を備え。見知らぬものばかりなはずなのに泣き出したくなるほどの哀切が揺らぐ胸の奥で湧き立つ。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ http://ktcom.jp/ 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!